

義なる神に訴える祈り

詩編七編

主はもろもろの民の裁きに当たられる。主よ、私の義と潔白にふさわしく 私を裁いてください。(9)

詩人は苦境からの救出を神に求めて祈ります。自分の義と潔白を神に訴え、神ご自身がその法廷において正しい裁きをしてくださるようにと懇願します。主なる神だけが人間のわざを全て見通し、その義に従って公平な裁きをしてくださると信じていたからです。今日の聖句のように語るのは、あまりにも自信過剰な高慢さの表れのように感じるかもしれませんが、確かに、神の前には全ての人は罪人です。詩人も自分には罪など全くないと考えているわけではありません。けれども、人間の間では明らかにすべき義というものがあります。それを自分の知恵と力で明らかにしようというのではなく、義なる神が私たちの弁護者として正しい裁きをしてくださると信頼したのです。人々の間で不当な中傷、悪意を受けるようなとき、義なる神の正しい裁きに信頼を寄せようではありませんか。